

佐藤一斎著「言志四録(一) - 言志録 - 」講談社学術文庫、講談社 1978年8月10日刊を読む

## 1. 惜陰(せきいん)

(1) 人は少<sup>しょうそう</sup> 壯<sup>あた</sup>の時に方<sup>せきいん</sup>りては、惜陰<sup>せきいん</sup>を知らず。

知ると雖<sup>いえど</sup>も太<sup>はなは</sup>だ惜<sup>お</sup>しむには至らず。

四十を過ぎて己<sup>いご</sup>後、始めて惜陰<sup>せきいん</sup>を知る。

既<sup>すで</sup>に知るの時は、精<sup>せいり</sup>力<sup>よく</sup>漸<sup>きょうや</sup>く耗<sup>もう</sup>せり。

故に人の学<sup>おさ</sup>を為<sup>すべか</sup>むるには、須<sup>りっし</sup>らく時<sup>べんれい</sup>に及びて立志<sup>りっし</sup>勉<sup>べん</sup>励<sup>れい</sup>するを要すべし。

しからざれば則<sup>く</sup>ち百<sup>またつ</sup>たび悔<sup>く</sup>ゆとも亦<sup>また</sup>竟<sup>つ</sup>に益<sup>また</sup>無<sup>つ</sup>からむ。

## (2)[語義]

少壯 - 年若くて元気が壮なる時。

惜陰<sup>せきいん</sup> - 陰はうつりゆく日かげ、時間を惜しむこと。

耗 - へる。

及時 - 若い時に。

不則 - 不然則と同じ。

百悔 - 幾度後悔しても。

## (3)[訳文]

人は、若くて元気壮んな時は、時間を惜しむことを知らない。

よし知っていても、そう大して惜しむには至らない。

四十歳を過ぎて始めて、時間を惜しむことを知る。

すでにその頃になると、精力がだんだん衰えて来る。

故に人は学問するには、<sup>すべか</sup>須らく若い時に志を立てて、大いに<sup>つと</sup>勉め励まなければならない。

そうでないと、後になって、どんなに<sup>くや</sup>悔んでも無益である。

## 2. 活きた学問

(1) <sup>けい</sup>経を読む時に<sup>あた</sup>方りては、<sup>すべか</sup>須らく我が<sup>あ</sup>遭う所の<sup>にんじょうじへん</sup>人情事変を<sup>と</sup>把りて<sup>ちゅうきやく</sup>注脚と<sup>な</sup>做すべし。

<sup>こと</sup>事を<sup>しよ</sup>処する時に<sup>のぞ</sup>臨みては<sup>すべか</sup>則ち<sup>すべか</sup>須らく<sup>きかしま</sup>倒に<sup>せいけん</sup>聖賢の<sup>と</sup>言語を<sup>ちゅうきやく</sup>把りて<sup>な</sup>注脚と<sup>な</sup>做すべし。

<sup>じりゆうえ</sup>事理融会して、学問は日用を離れざる<sup>いし</sup>意志を<sup>けんとく</sup>見得するに<sup>ちか</sup>庶からん。

### (2)[語義]

経 - 経書、中国の聖人の述作したもの。

注脚 - 注釈(ときあかし)、本文の間に書き込むものを注、本文の下に書くを脚という。脚は二行に細書するから足のようなのでいう。宋史、陸九淵伝に「六経我を注し、我六経を注す。学苟も本を知れば、六経は皆我が注脚なり」とある。また困学紀聞に「日用は是根株、文字は是注脚」とある。

<sup>じりゆうえ</sup>事理融会 - 事例と理屈がよくとけ合うこと。

### (3)[訳文]

<sup>けいしよ</sup>経書を読む時は、<sup>すべか</sup>須らく自分が<sup>すべか</sup>出会った<sup>すべか</sup>人事や事変を<sup>すべか</sup>とりあげて、<sup>すべか</sup>経書の注釈とするがよい。

実際に起こった事件などを処理する場合には、前と反対に聖人や賢人の言葉を持って来て、活用し、これを注釈とするがよい。

以上のようにすれば、<sup>と</sup>実例と理屈とがよく<sup>と</sup>融け合って、学問は決して日用を離れないものであるという意義を<sup>と</sup>納得することができるであろう。

## 3. 読史眼

(1) 一部の歴史は、<sup>みなけいせき</sup>皆形迹を<sup>しか</sup>伝うれども、<sup>じょうじつ</sup>而も情<sup>あるい</sup>実は<sup>し</sup>或は<sup>し</sup>伝わらず。史を読む者は、

<sup>すべか</sup>須らく<sup>けいせき</sup>形迹に<sup>つ</sup>就きて<sup>じょうじつ</sup>以て情<sup>たず</sup>実を<sup>すべか</sup>討ね出すを<sup>すべか</sup>要すべし。

### (2)[語義]

<sup>けいせき</sup>形迹 - あとかた、迹は蹟に同じ。

情実 - ありのまま、真相。

(3)[訳文]

歴史の伝えるところは、全部外に現われたあとかただけで、その内部に隠されている真相は伝わらない。

故に歴史を読むものは、ぜひとも、表面上の形跡けいせきから、隠されている真相を探し出さねばならない。

(4)[付記]歴史を読むものは、眼光紙背に徹するようにしなければ、真相はつかめう読史観を述べたものである。

4. 読書の感想

(1) 吾れ書を読むに方り、一たび古昔聖賢・豪傑の体魄たいはく皆死せるを想えば、則ち首かしらを俯ふして感愴かんそうし、  
一たび聖賢・豪傑の精神せいしん尚お存ぞんするを想えば、則ち眼まなこを開ひらいて憤興ふんこうす。

(2)[語義]

体魄たいはく - 体たいと魄たましい。

感愴かんそう - 身にしみて悲しみを感ずる。

憤興ふんこう - 発憤興起。

(3)[訳文]

自分は書物を読むに際して、一たび昔の聖賢や豪傑達の体も魄たましいも皆死んでしまったのだなと思うと、首をうなだれて、悲しい思いをするが、

しかしながら、一たびそれらの人々の精神はなお活き活きと存在しているのだと思えば、眼を開いて、発憤興起するのである。

5. 聡明の横(おう)と豎(じゅ)

(1) 博聞強記は聡明の横なり。

精義入神は聡明の豎なり。

(2)[語義]

博聞強記 - 礼記、曲礼上篇に「博聞強記にして譲り、善行あつに敦ゆずくして怠おこたらず。之を君子と謂う」とある。

精義入神 - 深く道理を研究して、神妙な奥義に入ること。易経、繫辞下篇に「精義入神は以って用を致す」とある。

(3)[訳文]

何事でも博く聞いて諸々の事情に精しく、記憶の強いということは、賢明の横幅である。

深く道理を探究して、神妙な奥義に入るというのは賢明の奥行きである。

(4)[付記]

一般に learning(学習)によって横幅は広がり、study(考究)によって奥行きが深くなるわけである。

我が国では幼稚園から大学院まで前者に傾斜し過ぎるので、独創性が涵養<sup>かんよう</sup>されない。

もっと自分で深く考え、世界的に独創性のある思想、文化、芸術、工業を創り出すことを切望する。

[コメント]

本を一冊だけ持って1～2年間過ごすという状況になったら何を持っていくかと問われたら、この佐藤一斎先生の「言志四録」だという人が昔は多かったようである。何回も、何回も折に触れて読み返し、自らを省み、明日を考えるのには最もふさわしい本の一つと私も考える。未読の方は是非御一読あれ。

- 2009年11月5日 ケープタウンにて 林明夫記 -